

ノーカット完全版～いずみニュースレター第13号への寄稿文

日本キリスト教団 原町教会牧師 寺田 進（てらだ すずむ）

・「いずみ」運営委員の一人に選ばれて

このたび「いずみ」運営委員に選出された原町教会の寺田です。2019年4月に原町教会牧師として、付帯する原町聖愛こども園の副園長として東京南支区から赴任しました。原町教会と聖愛こども園は東京電力福島第一原発から24.5kmの距離にあります。非力凡庸な私がそのような教会に遣わされたことは神に遣わされたとしか考えられず、畏れと感謝をもって受け止めています。

東日本大震災と原発事故当時のことを申しますと、個人的には出来事自体の過酷さが受け止め難く、同時に東京の生活のために東北の皆様を苦しめてしまった負い目をどうお返しすべきか、今後私はどうしたらいいのか思い悩みました。今でもそれは変わりません。そして、時を経ずしてCSの若きリーダーが「こんなとき教会が祈らないでどうするのか」という声を上げ、それ以来8年間、「被災地の祈り」と題して主日ごとにCS礼拝、公同礼拝で神に祈り続けました。毎週、被災教会、伝道所や学校に電話で祈りの課題を分けていただいて、つたなくても共なる祈りを重ねました。附属施設の幼稚園では、当時、除染をしながら園長として園児の安全と保護者の安心を取りつけようとして大変苦勞したことが思い起こされます。初期被曝以上に被曝することを拒否して遠くへ避難した家族もありました。それで昨年度まで定点で空間放射線量を測り続けました。9年目からは直接、あなた自身が行け、ということでしょう。神の計らいに畏れる他ありません。



日本キリスト教団 原町教会

・はじめに～福島第一原発に近い教会とこども園に遭わされて

私たちは放射能低線量被曝の長期にわたる人類と世界環境への影響について何も知らされていません。とりわけ乳幼児やこどもへの悪い影響が大きな心配です。それでも、ここに生き、ここで子育てをしようと決断されている方々と共に生きていきたいと思えます。

小高伝道所は月1回の主日礼拝を2019年1月から始めましたが、浪江伝道所のこれからの目途はたっていません。明治時代以来、連帯して歩んできた相双地方の私どもにとってこれは大きな悲しみの事態です。大打撃の被害を被ったと言えます。原町教会に遭わされて4カ月、いろいろと考えてしまうことがあります。この地にあって、いつまで続くかわからない放射能低線量被曝による長いトンネルの中にいるような漠然とした不安は、モヤモヤして晴れることのないであろうと感じています。でも、皆様と共々にすべてにかかわらず信頼と希望と愛によって立って、本当の生きるべき道を示され選び取って行きたいと思っています。

今回言葉にしてみて、ずいぶん感情的になっている自分にどうしようもない思いを持ちます。今の思いを記してみます。「いずみ」のこれまでの尊い働きに敬意を表しつつ、全国の「ニューズレター」読者のこの地と事柄へのシンパシーと注目の中、ご批判を受けることを承知で書いてみます。

・消えたもの、消えないもの

被災後8年経過した今や、私の住んでいる町はたいへん静かに落ち着いて見えます。初めて遠くから来た者にはこれが被災以前から変わらない風景に思えるかもしれません。しかし、屋内退避勧告のもと5週間、緊急時避難準備区域だった半年間を経て、今も放射能汚染状況重点調査地域に指定されているこちらです。私の目には少ない数ではない関連死なされた方々のことや、なにも情報がなく取り残されるようにして初期被曝なされた地元の方々のことが静かな風景にオーバーラップします。初期被曝当時の過酷で悲惨な状況とそこにおられた方々のお気持ちは、時々何かの拍子に堰を切って噴出するように語られます。常時語るなどできないその傷は聖書でパウロが言う肉体の「棘」というべきものとして決して消えはしないものです。

さて、原町ではフレコンパックが公園や校庭に見られるようなことはなくなりました。わが聖愛こども園でも、国によって園庭の地中深くに埋めたフレコンパック66トン余を2月に撤去してもらいました。また、当時こどものためにより安全で自然に近い園庭をと、職員と近隣住民と全国からのボランティアの方々の、もう本当に日本一の心が集まって除染に明け暮れた。その汚染物質、汚染土を園庭・教会境内地いたるところの地中に埋めて

いたわけですが、それらの土嚢などもすべて掘り出して昨年度までに搬送しました。そうした皆さんの愛と支援とご労苦によって、ここは、町中で私にとっては一番の輝かしい場所です。感謝です。けれども、それらの放射能を含んだ汚染土、放射線ゴミは、どこに運ばれたのかわかりません。中間施設に運搬されてやがて焼却されるのでしょうか。一息つく間もありません。



認定子ども園 原町聖愛こども園

フレコンパックは視界からは見えなくなりますが、環境内の放射能の量は減らないし放射能は消えないです。原町中心部の学校の校庭や目立ったところからは消えましたが、郊外の畑の真ん中や、海辺の被災地にはまだまだあります。奥まった自然豊かな町の街道沿いや、美しい農村風景の真ん中にその姿を忽然と現す大量のフレコンパックが残っています。また、いずれ、この地域から撤去され、埋められたり焼かれたとしても放射能は消えないで残留し続けます。痛ましい限りです。

市内のこどもの遊び場、山や川、海辺、田畑、公園、森林、土手、かつて泥だらけになって一日中遊べた、そういう遊び場が消えました。教会のすぐ近くの里山公園へは園児こどもたちは行きません。住宅部から森林部へは20mしか除染していないからです。半減期30年と言われるセシウム137が残留し、わたしたちは入り込むことは憚られます。公園や憩いのスペースは市内にありますが、園庭や校庭以外でこどもたちが遊ぶ姿を私は見たことがありません。小学校で放課後、屋外で遊んでいないなと思い、ある人に聞いてみますと、外は被爆が心配なので、学校でも率先して外で遊びましようと言えなくなったり、保護者にもそうしないでくれと発言があるのだそうです。下校時には児童生徒を迎えに来る車で学校の周囲は長蛇の列になるそうです。除染する人々の姿格好を見て警戒する保護者もいたようです。少なくとも家族がこどもたちだけを屋外で遊ばせることがなくなったのだと思われます。しかし子供の数自体も減ったでしょう。震災前7万人だった南相馬市の人口は現在約5万人。住民票がそのままという人も多く、ひっそりして活気がなくなっ

たと言われています。町の中心部が雑草の生え放題、野良犬は徘徊、ということはなくなり瀟洒な建物も増えましたが、寂しくなったとふと漏らす方もおりました。人口は毎年減り続けており、復興して人が戻って人口が増えるということはありません。避難先から戻ってくるのは高齢者の傾向があります。病院や医院が撤退して、残ったところには夜遅くまで大勢患者が集中するようです。

市民が楽しみにした自作の畑は消えました。半信半疑で作ってそろそろ食べ始めている人々もあります。そういうものを持ってきてもらって私たちの教会で放射能測定を続けていますが、時々驚くべき数値を見て目を覚まされることがあります。こちらの人々の美しい山や川海でとれたものを食する素晴らしい生活は奪われて消えました。原町の西側に美しい陽が沈む阿武隈山地ですが、かつては原町のシンボルとして老若男女がハイキングや登山、キャンプを楽しんだ景勝地は放射線量が高く立ち入り禁止です。水源の桜名所であった複数のダム周辺も高線量で今や野生の猿の群れが我がもの顔にしています。

町の多くの店だけでなく、こども園が頼りにしていた八百屋や魚屋さんは閉じてしまい数店を残して消えてしまいました。来てくれた除染ボランティアの人々の姿は見ることができなくなりました。寂しくなったという声を聴きます。仮設住宅に住んでいた人はわずかを残していなくなりました。新築の復興住宅に皆が転居したかというところでもないようです。復興住宅も満員ではなく、近くの大型スーパーは閉じたり建て替えされたりしています。働く人々やボランティアさんは、福島第一原発の見える大熊町の復興拠点のほうへ行っているようです。

以前はパラダイスのように遊んだ自然の素晴らしさは奪われ消えました。その中で永年営んできた歴史と暮らしは途絶え、そこで育つ生粋の相馬の子育ては消えました。年長者にとっては先祖伝来大切な土地、低線量被曝の不安に負けるものかと暮らしています。でも、そういうところに子どもたちと、子どもを持つ親たちは帰ってくるのか私にはわかりません。普段はとても話しにくいことで、皆黙っているのですが、残された低線量被曝の漠然とした放射能への不安だけは消えないのだと思います。

・福島の人には大人しいと自分で言う不思議、悲しさ

消えない不安も長期戦のあまり疲れ果て緊張感が途切れ、低線量被曝の緊張の中にいることをなんとも思わなくなったり麻痺してしまったり、一歩進んで大丈夫だと思いたくなるのも無理はないことです。それを待つかのように、現状肯定の強い声は高まり、同調勢力によって小さな良心の声は消し去られ、復興の声が大きくなり、やがて何事もなかったことにされたりしないでしょうか。報道で、自分たちは大人しいモノ言わぬと言われていた福島県人なのだがついに声を上げなくてはならない事態なのだ、という言葉聞いたことがあります。福島の人々は大人しくて、爆発後数日間の混乱の中で被曝させられたこと

や、強制的にそこで住むことを奪われたり、美しい海山川の自然の恵みをいただいて自分で採って食して楽しむ素晴らしい生き方を奪われたのですが文句を言わないように思えます。どうしてくれるのだ、返してくれ、原発は今後一切ノーだ！とは言わない。泣き寝入りではないのでしょうか、感情を押しとどめて過ごしているのではないかと推測します。

そのへんの心の機微には触れがたいものがあります。隣人に何か少しでも不安を漏らすと、それなら、どこかに行けばいいではないか、と煙たがられたり苛立たれたり、非難されるのだそうです。それほど、言う側の人々も私たちだって大きな決断をして故郷に残っているのだ、という気持ちの裏返しなのでしょう。言われる側も、そんな気持ちが分かるからこそ、言わないように黙って気持ちを押し殺しているのでしょうか。解消されないストレスを皆さんどうしているのでしょうか。まだわかりません。時々私も胸苦しくなります。大きな地震が先日もあって、翌日、郵便局員さんは「夕べは怖かったですね、津波が心配でしたね」と優しく言うのです。一方、遠くのある方は「いやあ、また原発が壊れやしないかと冷や冷やしたよ」。近くにいる者同士の微妙な表現法は私には未だに難しいです。実は私は「いずみ」の甲状腺検査を、この町や原発により近い町村でこそ実施してほしいと願っているのですが、まだ言い出せないでいます。



・新しい町作りと除染の本質

大熊町、南相馬市小高区、浪江町など第一原発からごく近いところで、あるいは飯館村のほうで新しい町づくりが見られます。何割か故郷へと帰還しているとは言われますがどうでしょうか。子どもたちは園庭はじめ人工的に造成されたコンクリートで固めた土地やゴム舗装された土地で遊ぶばかりです。親たちは安心して遊べる全天候型屋内施設を作りたいことを望んでいます。外で、自然の中で遊ばせようという選択をしなくなったのです。それでも子供たちの健康の将来にわたる保証はなく、私には現在のところ、多くが復興を進める役所の職員家族、工事の人々が住むにとどまるように見えます。そうした町は私の感覚が古いのでしょうか、昔テレビドラマか映画で見た宇宙植民都市みたいです。いや、都会型の町づくり考え方の延長にも見えてきます。22世紀への地域社会、町づくりの先取りというのでしょうか。実は東京下町生まれの私には、見慣れた風景とダブって珍しくなくも見えるのです。

さて、除染の本質は、そこに生きるために隣地に放射性物質を移動させること。自らの生活空間ばかりを（あくまでも）より低線量にすることを目的としていて、より広い面積からすれば、線量をまぶしているだけ、全体として薄めているだけ、ということなのだと言いたいです。残念ながら、たいへん利己的です。利己的な人間の性、人類の限界のようなものがここで究極的に突きつけられるものです。それは私たちの住む町中でして隣家との間でしてきたことと言えることでもあるし、大きなエリアについても言えると思います。そういえば人口に膾炙（かいしゃ）した「除染」という言葉の由来は、化学兵器に関係した軍隊用語のはずです。軍隊・国家の用語が日常生活に忍び込んできたのです。

常磐道を何度目かに車で通過したときにふと感じて、そういう自分に問題を感じたのですが、政府はよく高放射線量地域をここまでに食いとどめた、よくぞこれだけのこの地域に閉じ込めた、よくコントロールしたと評価しているに違いないと思ったことがありました。でもそれは間違った感覚です。起こした事故で放射能が放出された前の状態にはもう戻らないですし、放射能汚染（被曝）は環境全体への責任があります。核の後始末の仕方がいまだ分からないで進むしかない人類にとって、今後廃炉になる国中の原発の廃棄物をどうするのかという未解決の問題にもつながる重要課題です。核による環境破壊は終わりが見えない。人類と地球に対する課題だらけです。人類は核とは共存できない、とはっきり言いたいです。

・国際標準の感覚から～のど元過ぎれば～お人よしは無責任の始まり

5月に二人のカナダ人牧師と小高の町を歩きました。彼女たちは、新しい美しい家を見て、誰が建てたのか。誰が住むのか。誰がお金を出したのか、と怒っていました。国際標

準では、被害を補償するのは加害者と決まっているのではないかと言いたいようでした。日本人というのは、私も含めて、被害を受けても我慢ばかりして、思考停止にさせられて、世の中そんなものだ、しかたないと、まさに何事もなかったことにされることに慣れているのかもしれませんが。でもそのかわり、加害しても無神経で傲慢で悔い改めない、何事もなかったことにしたい、そういう体質を兼ね備えているのだと思われました。震災後、あれほど壊滅的にダメージを受けて、原発はだめだ、エネルギー政策転換の時だと誰もが気が付いたはずでしたが、またぞろ新しい原発を作ってまで原子力で行こうとする、2030年に原発で22パーセントのエネルギー政策はそういうことです。それによってかつて以上に繁栄しようとする、その指標として名ばかりの「復興」を急いでいる。あの時の反省、悔い改めはどこに行ってしまったのか、原発のない核と共存しない生き方を示されたはずではなかったかと本当に残念です。

・終わりに～悔い改めて小さくても自分のところから平和作りを

8月4日が「平和聖日」でした。1961年に原子爆弾によって被曝した広島教会の牧師、信徒がたが發議して翌年、教団として8月6日に一番近い主日を「核兵器の廃絶と恒久平和を祈ろう」と定められた日でした。時はキューバ危機の時代で全面世界核戦争の一手前までいったという時でした。第二次世界大戦後の世界も、そして目覚ましい「復興」を遂げた戦後日本も、核兵器と核の平和利用の両輪で動いてきたのです。その帰結が東京電力福島第一原発事故、爆発による放射能被曝なのだと思います。今も軍備と経済の両輪で競争のようにして行くだけが人類のすべてでしょうか。それでいいのでしょうか。私たちの世代は歴史に瑕疵を残し被造世界にゆるされざる罪を犯しました。潔い悔い改めと真の平和へと、なすべき方向転換は目に見えて明らかです。一人一人の本当の、主にある小さな毎日の平和運動が大切です。「いずみ」が今後もしようとしている「訪問と傾聴」、「保養プログラム」、継続的な「健康相談と検診」は、その平和を作る人々の大切な連帯のわざだと思います。

2019年8月29日記

